

令和7年度 伊那市立伊那中学校評価表

学校関係者評価；(A：十分達成された B：ほぼ達成された C：不十分であった) 自己(項目間相対を加味した到達度)評価(a：十分達成された b：ほぼ達成された c：不十分であった)

| 学校教育目標 | 重点目標(中長期的目標) |
|--|--------------------|
| 志を持って 勉強せよ 親切に (1) めざす生徒像・教師像 ○好き・適性を見つける ○確かな学力をつける ○「探究」を探究する ○個性・多様性を認め合う ○ふるさとの人・もの・ことと出会い、貢献する ○自分で考え、判断し、自分から行動する | 向学の気風あふれる学校づくり |
| | 今年度の重点目標 |
| | (1) 主体的に学ぶ生徒の育成 |
| | (2) 探究活動の推進 |
| | (3) 「教師の枠」を問う学校づくり |

| 総合評価 | | |
|--|----|--|
| ○学校自己評価アンケートで「自分にはよいところがあると思う」に「あてはまる」と回答した生徒は全体で80.9% (昨年度比3.3減)、また、90.3% (昨年度比0.9減) の生徒が「先生はあなたのよいところを認めてくれている」と感じている。同様の質問項目について、全ての保護者と職員が肯定的な回答をしている。めざす生徒像・教師像の、「個性・多様性を認め合う」について職員が意識し、日ごろからプラスの評価を心掛けたり、折に触れてその大切さを語ったりすることが、生徒の肯定的な自己評価や、寛容で開放的な人間関係の醸成につながっている。 ○自ら求めて学ぶ生徒へと変容していくために、長期休業中に自分の興味関心を生かし、やってみたいことに取り組む探究活動「伊那中マイチャレンジ」を拡充。3年間を通じた資質・能力の育成を図っている。学年の枠を超えたグループ「ルーム」で、対話を通して、自他の探究をより深めていくよう取り組んでおり、3年生の優れた探究に1、2年生があこがれをもつという好循環も起こってきている。学校自己評価アンケートで「自分で考えて行動する力が育っていると思う」に「あてはまる」と回答した生徒は全体で88.9% (昨年度比2.4増) と成果が表れてきている。 | | |
| 成果と課題 | 評価 | 改善策・向上策 |
| (1) 小学校で総合学習・総合活動や自然の中での体験的な学びを積み重ねてきた生徒の育ちをよさとして位置付け、生徒が自分の思いに応じて「選択・決定」しながら学習し、自分の学びを更新していく授業づくりを進めた。生徒の主体的な学習につながり、職員が自らの授業を見つめ直す機会となった。 | Aa | ○生徒の「選択・決定」をより拡充していくためにも、全職員で授業改善に取り組み、他教科にも積極的に学ぶようにしていく。また、生徒が自らの学びの更新を自覚できるよう、振り返り等の在り方についても引き続き模索していく。 |
| (2) 「伊那中マイチャレンジ」では、生徒の探究がより豊かなものになるよう、対話的な学習環境の設定やよりわかりやすい表現や発信の方法を学ぶ機会を設けたことが、質の高い探究活動へとつながった。一方で、個々の職員が担当の「ルーム」でどのように生徒を支援すべきかについては、職員の課題意識が見られた。 | Aa | ○「伊那中マイチャレンジ」では、活動を通して最終的にどのような姿を目指すのか、そのために、各学年でどのような力をつけていくのかを、職員が意識するとともに、生徒の豊かな発想の価値を職員が認め、伸ばしていけるよう、見取ったり関わったりする。 |
| (3) 「やってみたいことは やってみよう」を合言葉に、「当たり前」を問い、日課の変更や生徒会会則の改正等、新しい提案を行う学校づくりを進めた。それらが生徒のより充実した生活や活動につながった反面、職員が先を見通したり、提案がどのような影響をもたらすかまで考えたりすることについては課題が残った。 | Bb | ○活動の本来の目的は何を常に考え、また職員自身の価値観を由来にとらわれず、常に新しくしていく。新たな提案等の際は、様々な角度から全職員で吟味し、よりよいものにしていきたい。 |

| 領域 | 対象 | 評価項目 | 評価の観点 |
|-----------------|-------------------------|--|--|
| 教育 | 教育課程 | ○生活と学習を切り離さない学校づくり | ○生徒の生活の場に、思考力・判断力・表現力を育成する場が保障されているか |
| | | ○活用の力を伸ばす学習指導の推進 | ○学習指導要領に示された学力観に基づいて、授業やテスト改善が進められているか |
| | 学習指導 | ○個の多様性を生かした授業改善 | ○「子どもたちはどう学ぶか」という生徒の視点で授業を進めたり、ふり返ったりできているか |
| | | ○「主体的・対話的で深い学び」を柱とした学習 | ○自由度を保障し、生徒一人ひとりの考えが生きる授業ができているか |
| | 部活動 | ○主体的に部活動に取り組む生徒の育成 | ○生徒たちの自主的な活動により、心身の鍛練ができ、個性の伸長がなされたか |
| | | ○効率よく活動する部活動運営 | ○限られた時間の中で、部員にとって意味のある部活動が実施されたか |
| 生徒指導 | ○どの生徒にも居場所があり、個が尊重される学校 | ○生徒一人ひとりに応じた学習環境や学習方法が保障されているか | |
| | ○見通しの可視化と各方面と連携した生徒指導 | ○支援の方向性が明確化され、家庭、医療や福祉、行政と連携した生徒指導ができているか | |
| 学校運営 | 安全 | ○校内や通学路の安全の確保 ○自然災害等への迅速な対応 | ○校内や通学路の危険や改善箇所の把握を行ったか ○自然災害や獣の対応など適切に行なったか |
| | | ○情報社会に生きる生徒の安全指導 | ○情報化の中で被害に遭わない対処の仕方を身に付けたり、他人の権利を侵したりしない生徒の育成ができたか。 |
| | 地域との連携 | ○家庭や地域との意思疎通 | ○学校でのようすを情報発信できたか ○生徒個々のようすについて、家庭との間で情報共有や指導方法の方針について共有したか |
| ○学習を学校や教室にとどめない | | ○地域の素材を活かした教材、保護者、地域の方に参画していただく授業や活動ができたか。 | |

| 成果と課題 | 評価 | 改善策・向上策 |
|--|----|--|
| ○日常的に生徒自身が選択し調整する力を高めていけるよう、教師の一律の指示を減らし、考える機会を設定してきた。時間意識や生徒の持ち物等については、生徒の中からの声を取り上げ、全体に投げかけ、どのようにすべきかを学年集会等の場で考え合うことを通して、自分自身でよりよい生活を構築する経験を積んだ。 | Bb | ○学校づくりは生徒と職員が共に進める当事者であることを意識し、選択肢を示しつつともに考える機会を増やしていく。また、その中で多様な生徒が共存し、それぞれの生活を尊重しつつ、集団としての合意形成を図っていく意識を高める。 |
| ○知識を教え込む学習から脱却し、思考力・判断力・表現力を育成する授業づくりへの転換を図ってきている。一方で職員の技量や経験による取り組みの差も見られる。単元テストや定期テストでは、問い方を工夫し、これまでは可視化されなかった生徒の表現力等を評価する取り組みも進んでいる。 | Bb | ○授業では、生徒の「問い」や「願い」を大切にし、それらの解決のために探究していく授業づくり、単元づくりを目指していく。テスト等の評価では、負担が増えないように配慮しつつ、思考力等を問う形式を模索していく。 |
| ○11月の学校公開に向け、1学期から全職員で授業づくりを行い、生徒がどのような手立てでより主体的に学んでいけるようになるかを見取り、継続的に改善に取り組んだ。また、「探究」、「協働」、「UD」といった視点でグループで授業や学習環境の改善を行い、学習環境については生徒にも投げかけ、ともに考える機会をとった。 | Aa | ○今後も改善の視点を明確にした授業づくりを継続していき、職員が相互に学び合える環境を作っていく。また、生徒自身が、自分たちはどう学んで力をつけることができたかについて振り返り、自分なりの学び方を見つめられるようにしていく。 |
| ○「選択・決定」がある授業を目指すことを通して、より多様な学びの道筋を生徒がたどることができた。また情報端末等を活用し、常日頃からクラス全員の考えを集約、共有できることで、一人ひとりの考えのよさを見つけよう、生かそうとする思いが生徒、職員とも高まった。 | Ab | ○生徒の「選択・決定」を大切にした授業づくりは継続して進めていく。情報端末等活用を充実させていくとともに、他者の考えに触れることには価値があり、それを積極的に求めていこうとする心情をより高めていく。 |
| ○主体性をもって自分たちで考えて動こうとする個や集団づくりを目指しているため、顧問が細かく指示しなくても自主的に活動できる。ただし、取り組みの姿勢を互いに批評できる関係づくり等、より望ましい部の在り方について考え合う機会はまだ一層の拡充が必要である。 | Bb | ○自主的に活動できる長所をより伸ばしつつ、個や集団としての精神的な成長を図っていく。また、冬季日課の見直しにより、より充実した部活動の時間の確保を進めるとともに、生徒が部活動とほかの活動との適切なバランスを見出せるようにしていく。 |
| ○県の指針に則り、1日2時間以内の活動、平日1日は休養日を設ける等の運営をしてきた。限られた時間の中で、効率のよい練習を計画的に進め、バランスよい生活を送れている。部活動地域展開や生徒数減少の状況で、今後の運営方法や生徒、保護者、職員の負担の増加が懸念されている。 | Bb | ○令和9年度からの休日部活の地域展開について市教育委員会から示される部活動指針に則って運営していく。また、校内における部活動指導体制について、市教育委員会からの指示の仰ぎながら、引き続き健全な部活動運営に努めていく。 |
| ○教室に入りにくい生徒などには、寺子屋などのスペースを「多様な学びの場」として提供したり、情報端末を活用した遠隔授業を行ったりする等、個々に応じた対応をしてきた。中間教室や認定フリースクールとの連携や外部ボランティアの方々の協力を得ながら、生徒の実態や今後の進路選択を見据えた支援を行った。 | Bb | ○教室に入りにくい生徒が自ら学びの場を選択できるように、学習環境の選択肢を用意し、提案していく。また、保護者と連絡を取りながら、生徒の発達段階や状況をきめ細かく踏まえられるよう、対応の見直しを継続していく。 |
| ○支援が必要な生徒に関するアセスメントシートを作成、活用した。特コ職員を中心として情報共有を行い、諸機関との連携を進め、専門的な助言や協力が得られた。支援を必要とする生徒数が増加傾向であり、本人や保護者の願いをくみ取りつつ、対応を迅速に進めていくことが課題となっている。 | Aa | ○アセスメントシートの活用を、担任の他多くの職員で共有し、具体的な対応を確認した上で、家庭、行政や福祉、医療などの連携を進めていく。また校内支援委員会をより機能させ、多くの関係者で当該生徒や保護者に関わる体制を構築していく。 |
| ○危険箇所については、市教育委員会やPTAの協力を得ながら情報の収集や改善を行った。落雷やクマ出没等では、状況に応じて下校時の安全確保等の適切な対応をとることができた。ただ、より大規模な全校生徒の保護者引き渡しについては、運営上の課題もあり、マニュアルの作成や訓練などを進めていく必要がある。 | Ab | ○生徒の保護者引き渡しについては、次年度に具体的な手順について保護者と協働して検討し、マニュアル化していく。災害やクマ等についても、保護者に迅速に情報を提供するとともに、生徒にも災害発生時の適切な行動について伝えていく。 |
| ○SNSやネット上の種々の危険性について全校生徒に向けた講習会を実施。保護者への情報発信も行った。また、「命の学習」をカリキュラム化。外部講師を招いての講演や、学年の計画に即して、年間を通して自らの命を考え、守る教育に力を注いだ。 | Bb | ○情報端末や、SNS、生成AIの利活用が加速していく中で、安全性の確保はしつつ、どの段階でどこまで活用するか明確にしながら活用を進めていく。また、情報端末の正しい利用について、生徒自身が考える機会をとる。 |
| ○年4回の授業参観や部活動参観、学校だよりや学年学級通信を中心に活動の様子を発信し、保護者から本校の取組への共感の声をいただいた。また参観週間や学校公開を地域の方にも案内し、自由に参観できる機会をつくった。 | Bb | ○保護者や地域住民が学校に足が向きやすくなるよう、発信を工夫する。また、学校運営の方針をわかりやすく伝え、いただいた意見を反映させていく。 |
| ○生徒の状況について細かく共有を図ろうと努めた。しかし、指導方針の共有については、学校側の十分な説明や保護者との合意形成を今後もより丁寧に行っていく必要がある。 | Bb | ○今後も継続して情報の共有を図るとともに、本人、保護者の願いを十分にくみ取り、それを踏まえた指導方針を立て、実施していく。 |
| ○上伊那めぐり(1学年)、5日間に及ぶ職業体験学習(2学年)、高校の先輩・先生方と語る会(3学年)、地域の人々との交流(特支学級)等、地域住民に参画していただき、活動のねらいを共有しながら実施した。文化祭では、地域の皆さん、保護者、高校生等を講師に26講座の探究の時間(マインクレスト)を実施し、専門的な取組に触れることで、刺激を受け探究に対する姿勢や学び方を高めた。 | Aa | ○引き続き、地域資源を最大限活用した総合的な学習の時間や教科学習等を進めるとともに、持続可能な活動となるよう、地域の負担軽減の視点からも活動を再検討していきたい。そのためにも、準備段階から積極的に職員が地域に出向き、声や思いを聞き、学習活動に反映していきたい。 |

| | | | | | |
|--------|-----------------------------|--------------------------------------|---|--------|--|
| 研 修 | ○学習指導要領に示された学力観に基づいた学習指導の実際 | ○主体的・対話的で深い学びにつながるような授業観の転換ができたか | ○全職員で「選択・決定」がある授業づくりに取り組み、実践事例集を複数回作成し、それを基に意見交換をしたりすることを通して、自身の授業観を見つめ直したり、他教科にアイデアを得て自身の授業の改善のヒントをつかむことができた。若い職員も含め、今後も基盤となる教科の本質に迫る教材研究を蓄積していく必要がある。 | B b | ○職員同士が、それぞれの教科、経験等の持ち味を生かしつつ、生徒の立場に立って授業を振り返ることを大切にしていこう。また、教師の力の基盤となる教材研究に組み込み、教科等を学ぶよさを伝えていくことができるようにする。 |
| | ○地域に学び、社会性を身に着ける教師 | ○地域の方に学ぼうとし、子どもの人権に配慮した接し方が身に付いているか。 | ○上伊那めぐりや職業体験学習等を通じて、職員が地域の方の取り組みや考え方に接し、視野を広げた。 ○非違行為防止研修等で、人権に配慮した生徒への接し方について職員で協議し、具体的な注意点の共有が図られた。一方、自身の発言や行動が生徒へどう伝わるかについては、職員の意識の向上に課題が見られる。 | B b | ○前年の反省を生かしながら、地域の方が関わる学習をよりよいものにしていくとともに、引き続き地域に学ぶ姿勢を大切にしていきたい。研修等の中で具体的な接し方を学び、またアンガーマネジメントへの意識を高めていきたい。 |